

氏 名 : 佐藤 愛
学位の種類 : 博士 (健康科学)
学位記番号 : 研博第 33 号
学位記授与年月日 : 平成 28 年 3 月 9 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条 1 号該当
論文題目 : 自然分娩における女性の「産痛」の経験
論文審査委員 : 主査 大井 けい子
副査 上泉 和子
副査 兵藤 慶子

論文内容の要旨

I はじめに

産痛とは「分娩時に産婦が感じる痛み」である (我部山, 1993)。産婦にとって「自分が産痛に耐えられるか」という課題は大きく、それに対して助産師は「産婦が産痛を自らの力で乗り越え無事に分娩を終えられるように、産婦に寄り添い支える」役割をもつ。しかし、産痛の感じ方への影響要因や産痛緩和の効果に関する研究は多くあるものの、実際に女性がどのように産痛を経験しているのか、産痛経験についてその女性の語りの記述から探求した研究は見当たらない。そこで本研究は、自然分娩における女性の産痛経験を明らかにすることを目的として調査を行った。

II 研究方法と対象

本研究は Merleau-Ponty (1945) の現象学を哲学的基盤とした質的記述的研究である。研究協力者は自然分娩を経験し、産後 6 週間を経た女性 10 名である。非構造化面接によりデータ収集し、Pollio の現象学的アプローチの研究ステップ (Tomas et al, 2002) を参考に分析を行った。各研究協力者の語りの内容をテーマ化した後、研究協力者全員の語りのテーマから最終的な経験の構造を抽出した。研究は本学倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号 1349)。

III 結果

分析の結果、自然分娩における女性の産痛経験には〈自覚する〉、〈受け入れる〉、〈せめぎ合う〉、〈わかち合う〉、〈比較する〉の 5 つの構造があった。

〈自覚する〉経験は、産婦が陣痛に対して既にもっている知識・情報を根拠として、自身の身体に知

覚する痛みの様相が時間の経過とともにその知識・情報と一致していくことによって確かに陣痛が始まったと認識する経験であった。〈受け入れる〉経験は、産婦が産痛を分娩の過程において意味のあるもの・必要なものとして認識する経験であり、産婦はそれぞれの仕方（痛みも含めて親の責任である、出産の痛みは自然なものであり“あるべきもの”である、など）で産痛という現象を受け入れていた。〈せめぎ合う〉経験は、産婦が強烈な産痛の状況において『自分自身を制御できるかできないか』の瀬戸際にいる経験であった。〈わかち合う〉経験は、産婦が他者（家族や助産師、胎児）と交流することによって産痛が和らいだり、紛れたり、耐えられると感じている経験であった。〈比較する〉経験は、産痛について事前に得た知識・情報、または過去の産痛経験や痛み経験と比較することを通して、今回の産痛を他の経験よりも痛かった、あるいは痛くなかったという感覚と結びつけ、自分の経験として記憶する経験であった。〈比較する〉経験のうち、初産婦は自身の産痛がどのようなものであったかを自分の知識・情報や過去の痛みの経験と比較していた。また経産婦は以前の産痛と比較することで今回の分娩進行状況を予測し行動していた。

またこの構造は、〈自覚する〉経験から〈せめぎ合う〉経験への分娩の進行に伴う変化および順序性をもっていた。そして〈受け入れる〉経験は〈自覚する〉および〈せめぎ合う〉経験に影響していた。〈わかち合う〉経験は〈受け入れる〉と〈せめぎ合う〉経験とに相互に影響し合っており、〈比較する〉経験は〈自覚する〉経験に影響し、また〈せめぎ合う〉経験と相互に影響し合っていた。

IV 考察

女性にとっての産痛経験は、産痛をその身体によって知覚することを通して、産痛を経験したことの無い身体図式（身体が世界一内一存在であることを表現する1つの仕方。または各人が自己の身体についてもつ空間像のこと。）から産痛を経験し知覚した身体図式へと更新される経験であると推察された。また産婦が産痛を〈自覚する〉経験は、自分が妊婦であり『いつ陣痛が始まってもおかしくない状態である』という認識（図）を背景として、自らの身体に起こった痛み（モノ）の様相に注目し、時間の経過による変化によってそれが陣痛によるものだと知る（志向性）経験であったと考えられた。産痛を〈受け入れる〉ことと〈せめぎ合う〉ことには『陣痛を忍耐強く乗り越えることは、完全な母親あるいは成熟した女性になることにつながる「名誉」である』という日本古来の文化的思想や『産痛は産まれるために必要な痛みであり、受け入れるべき痛みである』という助産師の“文脈”が影響を与えていると考えられた。産婦が他者と産痛を〈わかち合う〉経験は間身体性（他者の行動を知覚することによって自己の身体に同じ行動が引き起こされること）によって成立していると推察され、〈わかち合う〉経験は産痛を和らげる方向へ働いていた。産婦は産痛を過去の産痛経験や他の痛み経験と比較しており、

この〈比較する〉経験には時間性（過去把持；自らが覚えているものを覚えている意識の働き。未来把持；自らが覚えているものによって予測すること。）が作用していたと考えられた。

論文審査結果の要旨

出産時の産痛は女性にとって「痛みに耐えられるか」といった、普遍的な課題である。先行研究の多くは産痛の評価方法、緩和方法、観察の手段、医療者の産痛緩和への態度である。本論文は、産婦の『産痛』の主観的経験をそのまま捉えようとするものであり、その経験世界を現象学的方法で生き生きと描いている。産婦はただ痛みに耐えているばかりでなく、痛みを受け入れ、果敢に挑戦している人と捉えている。産婦の経験している内面を生きた体験として捉えた論文は類を見ない。明らかにされた知見は、産婦が痛みを乗り越え、無事に出産することに加え、産婦がさらに満足な体験となりうるケアに示唆を与えている。よって、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値する。